



第462号 「がんばろう、日本！」 国民協議会 機関紙

発行所「がんばろう、日本！」 国民協議会

発行人 戸田政康 編集人 石津美知子

http://www.ganbarou-nippon.ne.jp

(東京事務所) 東京都千代田区九段北4-3-16 サンライン第14ビル6階 〒102-0073 TEL 03(5215)1330 FAX 03(5215)1333

(発行所) 東京都東大和市南街2-17-16 パピルス会館 〒207-0014 TEL 042(566)2950(代) FAX 042(566)2949

# 立憲民主主義の旗は立った ここから立憲民主主義を支える意思を 集積していくために

## 「国家がまっとうな国民をつくる」政治観 vs 「国民がまっとうな政府をつくる」政治観 ～ボトムアップの民主主義

第48回衆院選は戦後二番目に低い53・68%の投票率で、小選挙区での得票率48%の自民党が議席の74%を占有し「圧勝」した。内閣不支持率が支持率を上回るなかでの自民圧勝は、一議席を争う小選挙区制において野党が分裂していたからというのには、政治力学的にはその通りだ。しかし今回の総選挙からは、旧来とは異なる政治観、国家観、民主主義観の違いが見えてくるのも確かだ。結党したばかりの立憲民主党が野党第一党となったことは、その象徴だろう。ツイッターのフォロワー数でも自民党を抜き、短期間に8500万円の個人献金が集まった。街頭演説では雨のなか、各地でこれまでにない数の人々が集まり、足を止めて耳を傾けた。

選挙戦最終日、八千人(主催者)が集まった新宿で、枝野代表は次のように訴えた。  
「この国の政治が国民から離

れている。そんな思いで、何とかその受け皿になりたいと、旗を立てました。でも、こんなに短期間で、こんなに多くの皆さんにご期待を頂いて、私は反省をしています。私自身も含めて、この国の政治がいかに国民の皆さんから遠くに行ってしまったのか。そのことに、多くの皆さんが苛立ちを感じておられたのか。多くの皆さんからご期待を頂けば頂くほど、そのことを痛切に感じる選挙戦でありました。

国民の暮らし、草の根の声から離れて、政治が上の方に行ってしまう、上から国民の皆さんを、国民の暮らしを見下ろしている。だから暮らしの足下が見えない。こうした政治の流れを変えていく。こうした政治の流れにおかしいと思っている人たちの声を受け止める。そんな存在に、立憲民主党はなりたいと思っております」  
<http://satilaws.web.fc2.com/>

CDPist.html#50

立憲主義とは何か、何のための憲法改正か、民主主義は多数決なのか、ボトムアップの民主主義とは何か、「上」からの経済成長(トリクルダウン)なのか、「下」からの経済成長なのかetc. 立憲主義や民主主義、憲法観をめぐる論戦の軸が提起されつつある。それは、安倍政権批判の「受け皿」とはまったく異なる次元に、「もうひとつの選択肢」の旗を立てる試みでもある。今回の総選挙はその始まりとなるはずだし、ぜひそうしたいものだ。

「国家がまっとうな国民をつくる」という政治観 vs 「国民がまっとうな政府をつくる」という政治観、国家観の違いが浮かび上がっている。前者は、国民が政府を構成する(権力の正統性は国民の付託にある)という規定が欠落した自民党改憲案に端的に表れている。ここからは権力をしぼる立憲主義は、むしろまっとうな国民を破壊する考え方にみえる。(10/21)シンポジウムでの廣瀬克哉・法政大学教授の提起。シンポジウムの詳細は次号に掲載)。

枝野氏は演説で繰り返し、以下のような趣旨を述べた。永田町に長くいると、政治家が国民を統治すると勘違いする、自分もそうだったかもしれない、しかしみなさんは「統治される」のではなく、みなさんが統治する、主権者はあなたです。政治家、政府はみなさんから付託された範囲においてのみ、権力を行使することができるにすぎない、と。

こうした政治観、民主主義観、国家観の違いを軸にすると、「野党分裂↓自民圧勝」という表面的な政治力学では見えなかったものが見えてくる。例えば「野党の状態が整わないタイミングを狙って解散するのは、国民の選択権を事実上奪う」安倍首相が野党に勝った側面はあったが、首相が国民の選択権を封じ込めることに成功したのではないか。これが民主主義を破壊している(野中尚人・学習院大学教授 朝日10/24)。

解散権の制約は憲法改正の論点となりうるし、それを狭い意味での「権力の制約」としてだけではなく、「国民の選択権の保障」↓「国民がまっとうな政府をつくる」条件整備のための

(発行所)  
東京都東大和市南街2-17-16  
パピルス会館 〒207-0014  
TEL 042(566)2950(代)  
FAX 042(566)2949  
〈郵便振替〉00160-9-77459  
「がんばろう、日本!」国民協議会  
ゆうちょ銀行 019店 当座0077459

**1部 300円**  
定期購読 半年2,000円  
一年3,500円

### 今号の紙面

2面	書評「震災市長の手記」
2-3面	沖繩で考える基地と暮らし、平和
3-5面	インタビュー
	「沖繩の地表と深層」
6-8面	佐藤学・沖繩国際大学教授 田む会「京都」「中東を歩く」
9-10面	末近浩太・立命館大学教授 田む会・特別編 戸田政康・代表

言ってきたなかに、国民主権の  
主体性、立憲民主主義の当事者

## 多様性を認める包摂・連帯と排除 ガバナンスをめぐる対立軸

選挙戦ではもうひとつ、これ  
からの対立軸を彷彿とさせる象  
徴的な光景があった。最終日、  
立憲民主党の街頭演説では、新  
宿バスタ前を埋め尽くした人々  
が小雨のなか、後ろの人のため  
に傘をたんだり、互いに譲り  
合ったりするなかで、「選挙は  
終わりますが、立憲主義を取り  
戻す戦いはこれからです。立憲  
民主党という新しい政党をいっ  
しょに作ってください。永田町  
に引きこもらないように監視し  
てください」という呼びかけに、  
一体となって呼応していた。

例えば、小池氏の「排除」発  
言。「驕り」の現れと批判され  
たが、ご本人としては「政党は  
理念、政策で一致すべき」と言  
いたかったのだそう。では「言  
葉が足りなかった」だけなのか。  
そうではないだろう。

性を作るといって入って  
たのか、ということの総括であ  
り、分岐でもあるという性質に  
なっている。国民主権の主体性  
を作る、ということが欠けてい  
る。弱い度合いに依り、「保  
守」二大政党論、「与党内疑似政  
権交代論」に回収される。それ  
が鮮明になっているということ  
でもあります(戸田代表  
10面「田む会」特別編)

こうした対立軸はさらに具体的  
なものになっていくはずだ。  
政党は「魔法の杖」のような  
解決策を示してくれる存在では  
なく、「有権者の困りごとを聞き、  
課題を認識してくれる。そ  
ういう場としての存在です。自  
分たちは見捨てられていない、  
政策決定に関与できていると有  
権者が思うことは民主主義に  
とって大切で、そこで政党が果  
たす役割は大きいはず」(待  
鳥聡史・京都大学大学院教授  
中央公論10月号)。

こうした政治的有用感を育む  
場を「敵を叩く」ことで作り出  
すのか、それとも多様性を認め  
あう連携と共同で作るのか。  
か、ということでもあるだろう。

安保法制以来の「市民と野党  
の共闘」が持続しているのは、  
草の根の現場で人々が時にぶつ  
かり合いながら、違いを認め  
合ったうえで、どうすればいっ  
しょにやれるのか、一歩ずつ積  
み上げているからだろう。政党  
や組織の枠組みを軸にした「共  
闘」「統一戦線」とは違う、新  
たなローカルガバナンスの転換  
が始まっているはずだ。

地域課題に取り組む「場つへ  
り」においては、さらにその経  
験、教訓は集積されているはず  
だ。生活環境やなりわいをほじ  
めとする暮らしの多様性を前提  
にして、他者と「目線を合わせ  
る」「湯浅誠氏」という関係性  
を作ることは、「主権者を引き  
受ける」「湯浅誠氏 四六一号  
「田む会」」当事者性を涵養する  
ことでもある。

## 立憲民主主義を支える意思を集積していくために

### 伴走するフォロワーへ

立憲主義という「古めかしい」  
言葉が登場しているのは、単に  
憲法が危ないから、というだけ  
ではない。多様性を前提にした  
民主主義と立憲主義の新たな調

憲法改正として問題設定するこ  
とは、憲法改正の国民的論議の  
土俵をつくることにもなるだろ  
う。九条「お話し改憲」に対し  
ても「反安倍」の受け皿ではな  
い、ボトムアップの民主主義か  
らの「もうひとつの選択肢」を  
つくりだしていく。そういうス  
テージにはいるとこうだ。

また、今回の選挙で小選挙区  
制の行き詰まりがあらわになっ  
た、この見方もあるが、中選挙  
区制や比例代表を増やしたりす  
れば、政権交代を封印すること  
になるだろう。政権交代のサイ  
クルを回すべきという立場な  
ら、「小選挙区だからこそ、野  
党が選挙協力をやれば、自公に  
も対抗できることがわかった。  
政権交代が重要と考えるなら、  
今の選挙制度は決して悪くない。  
問題は、野党が今の制度を  
うまく使っていないこと  
だ」(野中 前出)ということに  
なる。

今回、民進党が希望と立憲民  
主へ分解したことは、「政権交  
代」「二大政党」を目指すとし  
てきた、九〇年代以来の政権交  
代可能な二大政党論の総括でも  
ある。日本新党以来「非自民非  
共産」という枠組みで、いっしょ  
もの新党が出来ては消えた。そ  
の行き着いた先が希望の党の  
「保守」二大政党論。これは結局  
選挙で政権交代というサイクル  
が出来ないなら、与党内の疑似  
政権交代の構造をつくる、とい  
う問題設定に回収される。

「立憲民主の立ち上げは  
選挙で、有権者の一票で政権交  
代するシステムを目指す」と

一方、安倍総理が「リベンジ」  
と称して行った秋葉原での街頭  
演説は、日の丸が林立するなか、  
大音量での派手な演出のかたわ  
らで、罵倒や威圧、こせりあい  
があちこちで繰り返られる殺  
伐とした雰囲気だった。以前な  
ら、後援会単位の参加者の和気  
あいあいとした雰囲気が多少な  
りともあったのだが、そういう  
雰囲気は皆無。人々の一体性が  
感じられるのは「敵を叩く」と  
きの盛り上がりだけ、という異  
様な光景だった。

多様性を認める包摂・連帯  
と分断と排除。ガバナンスを  
めぐるという対立軸も抽象論  
ではなく、人間関係の作り方(人  
格形成)、組織のあり方などの  
具体性として見えてくる。

のよつに民主主義から独裁が生まれることもある（立憲的独裁）。民主主義をルール（憲法）によって制約することも、主権者がそのルールを変える（憲法改正）こともできるという立憲民主主義は、国民の中にそれを支える意思が集積されてこそ可能になる。

「憲法について」議論の自由度が増したのは確かですね。でも、肝心の『憲法への意志』がどこにあるかと考えると暗たんたる状況です。『憲法への意志が憲法の規範力を支える』日本の場合は『憲法への意志』が、9条とその支持層に限られており、憲法のコアをなす立憲主義の本体が、それによってのみ支えられるという構造になっている。『他方で、いたずらに憲法を敵視する復古的な勢力だけが、依然として改憲への『意志』を持っている。この状況でもかまわないという立場を取ると、立憲主義そのものの否定に加担することになると思えます。そっやって憲法の根幹を

奪われてしまうことへの危機感が、『真ん中』には感じられませんが、もしそこに、立憲主義の敵を退ける強い『意志』を見出せる状況ならば、9条の是非を視野に入れた、より広範な憲法論議が可能になります」（石川健治 5/3毎日）。

立憲民主主義といっていますが、普通の人にも感覚的に理解できるようにになってきたなか、今後始まるであろう憲法改正をめぐる議論では、この立憲民主主義を支える意思が試されるだろう。改憲勢力が三分の二を超えた、とされる国会で「数の力」だけで発議を強行するような立憲的独裁に道を開くのか、それとも立憲民主主義をより機能させる、「国民がまっとうな政府をつくる」条件整備のための憲法改正として問題設定することができるのか。

代表制民主主義や政党政治が機能していかないときに、それらをどう再生するか、という問題設定から憲法改正を議論する。これは、民主主義から独裁が生まれた（立憲的独裁）歴史的教育

訓を踏まえたヨーロッパでは常識だろう。緊急事態法・条項に關しても、非常事態から憲法停止・立法権停止→行政権力への全権委任という話ではなく、非常事態においてもこのように立憲主義をキープするか、という問題設定から議論される。この常識が分かれば、「お試し改憲」がいかに非常識か、分かるはずだ。

一方、危機の時代にはナショナリズム、排外主義が煽られ、それが立憲的独裁に道を開くことになる。これをどう抑えこんでいけるか。戦前日本でも「天皇機関説」（大日本帝国憲法下での立憲主義）は常識で、それなりに民主的だった「空気が数年で一変した。それは決定的には人々の感情だ。常識の理屈はもとより屁理屈さえも、感情を煽る「無理屈」の前に沈黙させられる「空気」。

今はフォロワーのなかにも「おかしいよね」と、踏みとどまるものが出てくるようになりつつある。フォロワーのなかにもそういう雰囲気があれば、常

識が分かっているも踏みとどまるのは難しい。ここをいかにして、立憲民主主義を支える意思を作ることができるか。

「そのためには『応援』ではなく『伴走』するフォロワーが必要になります。伴走するということとは、後ろをついていくのではなく、いっしょに走り、場合によっては方向を示唆したり、『進もうんじやないか』と提起したりする関係性です。日ごろからそういう付き合いをしていなければ、『おかしいんじゃないか』というのも、説得ではなく『抗議』や『文句』になってしまふ。

伴走することによって、普通の人々が当事者性を持ち、参加の実感を持つ。その強みをどう生かすか」（戸田代表 9-10面「囲む会 特別編」）

地域の現場、自治の現場のなかで「伴走するフォロワー」として、立憲民主主義を支える意思をともに作り出し、集積していく。

■問い合わせ 03-5215-1330

11月6日(月) 午後7時より 同志社大学寒梅館

◆大阪「日本再生」読者会(会費 500円)

11月14日(火) 午後6時より ドーンセンター

◆北九州「日本再生」読者会(会費 500円)

11月11日(土) 午後3時30分より 小倉商工会館

\*\*\* 以下は事前のお申し込みが必要です \*\*\*

●「がんばろう、日本!」国民協議会 第八回大会 第五回総会

11月12日(日) 午前10時から午後6時

「がんばろう、日本!」国民協議会事務所(市ヶ谷)

●第107回 シンポジウム

「立憲民主主義の観点から考える外交・安全保障とは」(仮)

12月3日(日) 午後1時から5時

TKP 神田駅前ビジネスセンターホール5階

川島真・東京大学教授 李鍾元・早稲田大学教授

大庭三枝・東京理科大学教授 大野元裕・参議院議員 ほか

参加費 2000円

●望年会 in 東京

12月23日(土・祝) 午後4時から

「がんばろう、日本!」国民協議会事務所(市ヶ谷)

会費 1500円(予定)

●第29回 関西政経セミナー

「まちづくり・地域経済と、自治・民主主義」

11月4日(土) 午後2時から6時

キャンパスプラザ京都第4会議室

川勝健志・京都府立大学准教授 田中誠太・八尾市長

中小路健吾・長岡京市長 ほか

参加費 1000円

●望年会 in 京都

12月7日(木) キャンパスプラザ京都(予定)

午後6時から 特別講演会 中西寛・京都大学教授

会費 1000円

午後7時から 懇親会 会費 3500円